
想夜

沢村想夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想夜

【Nコード】

N5893S

【作者名】

沢村想夜

【あらすじ】

黒い髪と黒い瞳。名は棗^{なつめ}。幼い頃に親を失った棗は義父の教えを受け、隣国との戦争に臨み敵を討とうとする。果たしてそれが正しいことなのか。

ウサギ（前書き）

連載ははじめてです。おかしな点が多々あると思います。ほんの1、2行でも読んでいただけたら嬉しいです。

すみませんが更新もすごく遅くなるかと思っています。

こんなダメダメに同情して読んでくれた方、ありがとうございます。

ウサギ

それはじつと息を殺し、様子を窺った。

まるで、敵に見つからぬよう暗闇に身を潜めるウサギのように。

身体は小さく、手足も細い。

長い間洗っていないと見える、ぼさぼさの黒い髪。その奥には、綺麗な整った顔。

とても滑らかで色白であろつその肌は、薄汚れて黒くなっている。

少年か、あるいは少女か。

見分けのつかないその子供は、ただただ、息を殺していた。

耳をピンと立て、気配を探るウサギのように、ただただ、息を殺していた。

真っ黒なその瞳に映るものは

果たして希望か、絶望か。

1（前書き）

早速連載がスタートしたものの、初っ端から遅いです・・・（汗）
誤字、脱字が多いかもしれないです。気がついたら、面倒でもご指摘いただけると嬉しいです。

「^{なつめ} 棗！もつとしつかり狙え！そんなんじゃ使いものにならねえぞ！」

「はい！すみません！」

棗と呼ばれたその子供は、立って敬礼をし、また腰を低くして銃を構えた。

大人の軍人も多数いる中で少年隊員らも混ざって訓練をしていた。その中でひととき目立つ棗は、他の少年らに比べて小柄で、何よりぶかぶかの帽子からちらりと見える真つ黒な髪が棗を目立たせていた。

「はあー。今日もめつきりしごかれたなあ」

頭をびしょびしょにして、棕櫚^{しょうろ}は棗の隣に座った。この少年は背が高く、棗よりも歳が2つ上で面倒見もよい。

「棗はこのちつこい体のどこにそんな体力があるんだ？」

棕櫚は棗の頭をくしゃくしゃにしながら言った。

「無いよ、体力なんて。やっぱり男のほうがよかったな」

「そうか？」

「当たり前じゃん」

「女だったら、少しは敵だって隙を見せやすくなるし、場合によっちゃあ見逃してくれるかもしれないんだぜ？」

「お前何てこと！」

棗が思わず立ち上がると、

「あー、悪い悪い。頼むから義父^{おやじ}さんには言わねえでくれよ」と、棕櫚はへへっと笑って頭をかいた。

棗はこの少年が嫌いではなかった。というより、この少年には皆

から好かれる何かがあつた。そばにいる人を惹きつけるような不思議な何かが。

「そういえばさ、棕櫚はなんで少年軍隊に入ろうと思ったの？」
棗はまた座りなおして言った。

「ん？そりゃあ、俺は勉強はできねえし、ケンカだけはよくできたからよ。それにお前の義父さんを始めて見た時、この人みてえになりてえって思つたんだよ」

棕櫚はやっぱりへへと笑つて言った。

「そういう棗はどうなの？」

「え、オレ？オレは・・・」

この少年軍隊に女として特例で入った棗は、隊の中で「私」と言うのを許されていない。これは、他の女子隊員も同様だった。

オレは・・・この少年軍隊に・・・

棗は言葉を必死に考えた。

オレは、どうして少年軍隊に・・・

握った手に汗が滲む。

少し間があいて、

「そんな悩むようなことなら言わねえでいいよ。なんか事情でもあんだろ」

と棕櫚が言った。

「んじゃ、また明日」

棕櫚は、棗の頬を手の甲でぺちぺちと叩いて、去つていった。
その広い背中が小さくなつていくのを眺めながら、棗は考えた。

オレが・・・ここにいるのは・・・

壁に寄りかかつて目を閉じる。

オレがここにいるのは・・・義父が部族長・・・だから？いや、違

う。復讐のためだろ。

棗は心の中で繰り返す。復讐。そう復讐の・・・ため。

14年前。かの有名な「霜月戦争」で軍人をしていたという棗の父は、命を落としたという。櫛しきみの部族長である海蘭うんらんは、この戦争にかろうじて”勝利”し、棗を引き取って育て、今は棗の義父ということになっている。

檀まゆみの部族とは今も仲が悪い。近々、また戦争になるのではないかと噂されているほどだ。棗は幼い頃から、「敵は檀かたきの連中だ」と義父に言い聞かされて育った。見た事も話した事も無い檀の者たちは”敵”ということしか頭にはなかった。

棗は顔もわからぬ親の敵を討つ為、少年軍隊に入った。強くなりたい、ただそれだけを思い入隊した。棗は少年軍隊の中でも数少ない女隊員であり、また、当時の最年少でもある。

棗は小さく息を吐き、その場を立った。

思い出しても仕方がない。帰って飯でも食って、何も考えず一日を終えよう。

それが一番だから。

そう、今自分は幸せなのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5893s/>

想夜

2011年10月9日00時39分発行